

# 龐統と諸葛亮

——三國故事における軍師像の變遷——

土 屋 文 子

## 序 異能者・諸葛亮

『三國志演義』における諸葛亮が、「古今來賢相中第一奇人」<sup>(1)</sup>「未出茅廬、已知三分天下」<sup>(2)</sup>と稱されるように、全書中もつとも卓越した智謀と洞察力を備えた存在として描かれていることは、もとより言うまでもない。一方、その超人的な智謀ないしは洞察力の一つの根元が、天文を觀て未來を豫知し、あるいは風を祈り星を祭るといった、一種マジカルな異能であることも、多くの指摘がなされている。

諸葛亮のこうした異能は、『演義』以前の三國故事の中にも現れており、唐代の五丈原故事や、元代の『三國志平話』<sup>(3)</sup>では、いずれも將星を壓する法術を執行している。また、諸

葛亮以外にも、説話に登場する軍師や武將は、しばしば類似の異能をもち、兩軍の異能者同士の對決が、合戦の歸趨を制することすらある。だが、『演義』の主要登場人物中、異能を驅使するのはほぼ諸葛亮のみといってよく、したがって『演義』の戦争場面において、異能者同士の法術合戦が見られることはまずない。

豫知や呪術といった異能は、當時の認識においては、必ずしも非現實ではなかったにせよ、少なくとも非日常のものであったはずで、その點、荒唐無稽な要素を削り、史實寄りに傾斜したといわれる『演義』において、異能者が活躍の場を與えられないのは當然である。とはいえ、諸葛亮以外の異能者が、『演義』に全く登場しないわけではなく、戦争場面に

において諸葛亮のみが異能を驅使するのは、いささか奇妙に感じられる。

そこで本稿では、『演義』以前の三國故事に、諸葛亮と同類の異能者の存在を求め、彼らと諸葛亮との比較を通じて、異能者たちの扱いおよびその偏向が、三國故事の發展史を及ぼしている作用について、若干の考察を試みたい。

## 一 異能者としての軍師

三國故事に登場する諸葛亮の異能は、風を吹かせ、あるいは星の落下を阻止するなどの超常現象を起こす能力と、占術によって天意を知る豫知能力に大別されるが、異能という面に限っていえば、『演義』に登場する異能者は、諸葛亮だけではない。

超常現象を起こす異能者の例としては、張角兄弟、于吉・左慈が挙げられる。

豫知者については、異能としての豫知能力を明確に持つのが紫虛上(道)人・管輅・李意、異能者であることが明示されないものの、世外の高人として他の人物とは一線を畫した位置にいるのが、司馬徽・崔州平ら隱士たちである。

さらに神醫華佗、曹操の馬超討伐の折に登場する夢梅居士

なども、異能者の邊縁に位置する人物といえよう。

このうち、華佗・管輅・張角兄弟、于吉・左慈・李意は、史書ないしは志怪小説にその異能が記載された、いわば由緒正しい異能者たちである。司馬徽や崔州平らは、史上の諸葛亮と同じく、襄陽の名士グループに所屬していたが、特に豫知的な言辭を述べたことは記録に見えない。また、夢梅居士こと婁子伯が、馬超征伐の折、凍土を利用して築城するよう曹操に助言したことは史書に見えるが、史上の彼は『演義』に描かれているように終南山の隱者などではなく、曹操の部下の一人であった。

なお、龐統の死を豫言する錦屏山の隱者、紫虛上(道)人は、現時點で該當者が特定できず、『演義』の創作した人物かと考えられる。

これらは、冒頭で鎮壓される張角兄弟を除けば、いずれも物語の本筋からはやや外れた位置で、傍觀者ないし助言者的な役割を果たすのみで、自ら軍事的・政治的な活動を行うこととはない。一方、主要人物の一員である諸葛亮の異能は、すべて軍事的・政治的な意圖および作用を有しており、換言すれば諸葛亮は、『演義』において唯一、軍事・政治に一貫して積極的關與を續けた、いわば“軍事的異能”者である。

軍師や武將が異能者であること自體は、説話の世界では珍しくはない。だが、軍事的異能者がある程度普遍的な存在であったとすれば、説話の中でも長い歴史を持つ三國故事に、諸葛亮のごとき軍事的異能者が他に全く登場しないのは、却って不自然と考えられる。そこで、以下では『演義』以前の三國故事を材料として、諸葛亮の周邊からその同類を探してみたい。

## 二 司馬懿と周瑜——軍師と參謀

三國故事において、諸葛亮の生涯前半の敵手として設定されたのが周瑜であつたとすれば、後半の敵手を務めるのは司馬懿である。

『演義』では、司馬懿と諸葛亮の對決は、北伐期全般にわたっているが、史書によれば、兩者の直接對決は第三次北伐以降、ことに蜀漢建興十二年（二三四）、第五次北伐における五丈原の對陣が主なものである。<sup>(13)</sup>したがって、兩者の對決が故事としての發展を見せ始めるのは、まずこの五丈原故事においてであつた。

唐代に流布していた五丈原故事——劉知幾のいわゆる「諸葛猶存」<sup>(14)</sup>故事——は、生者を装った諸葛亮の偽裝が、司馬懿

の占トを欺くというものである。例えば景霄『四分律行事鈔簡正記』卷十六には、

孔明：因得病垂死，語諸軍曰，主弱將強，爲彼所難，若知若知〔衍二字〕吾死，必遭彼伐。可將微盛土，安吾足下，取鏡吾面。…魏王有將司馬仲達，善卜，卜云未死。何以知之。踏土照鏡，故知在也，不敢進兵。<sup>(14)</sup>

とあり、司馬懿と諸葛亮が占術という同じステージで對決していることが看取される。なお、雜劇『諸葛亮博望燒屯』第四折にも、曹操の軍師管通なる人物が登場し、占術をもって諸葛亮に挑むくだりがある。<sup>(15)</sup>

また、『演義』においても、司馬懿と諸葛亮が陣法を戦わせる場面が登場する。

孔明曰、汝欲闖將耶、欲闖兵耶、欲闖陣法耶。仲達曰、先闖陣法。孔明曰、汝先布陣我看。懿回入軍帳下，手執黃旗招颺，左右軍動，排成一陣，復上馬出陣，問曰、汝識吾陣否。孔明笑曰、吾軍中末將亦能布之。此乃混元一氣陣也。懿曰、汝布一陣我看。孔明回車入陣，把羽扇一搖，衆兵變成一陣，復乘車出陣，而問曰、汝識吾陣否。懿曰、量此八卦陣，如何不識也。孔明曰、是便是了，汝敢打吾陣否。懿曰、既然識之，如何不敢打耶。

：司馬懿回到本陣中，喚戴陵、張虎、樂綝三將，分付曰，今孔明所布之陣有八門：汝三人可從生門打入，往景門殺出，復從開門打入，此陣可破。：且說張虎殺入蜀陣，只見陣如連城，衝突不出。：只見重重疊疊，都有門戶，那裏分東西南北。三將不能相顧，只管亂撞，但見愁雲漠漠，慘霧濛濛。(20—10)《孔明祁山布八陣》

ここでの司馬懿は、一方的に諸葛亮に翻弄されるのみだが、やはり基本的には同一のステージにしていると見てよからう。多くの説話に登場する奇怪な陣形のヴァリエーション<sup>(17)</sup>にみられるように、陣法はそれ自體、一種神秘的な力をもつものと考えられており、したがって陣法驅使の能力は、現實の將帥の職能であると同時に、説話中においては軍師の異能の一部でもあった。なお、現代民話においては、司馬懿は諸葛亮の同門とされることがある<sup>(19)</sup>。

つまり司馬懿は元來、諸葛亮と對等の軍事的異能者と見なされており、兩者の對決は本來的に、異能者同士のそれであったと推察される。

對照的なのが、諸葛亮と周瑜の關係であり、荊州の歸趣をめぐる兩者の對決には、智謀を盡くした明争暗闘こそあれ、異能による對決は片鱗すら窺えない<sup>(20)</sup>。赤壁における諸葛亮の

祭風は、あくまで對曹操戰術であつて、周瑜を目標とするものではない。

諸葛亮にせよ、司馬懿・周瑜にせよ、主君の下で軍勢を指圖する立場にあるわけだが、假にこれら軍配者のうち、マジカルな異能者を軍師、リアルな軍事顧問を參謀と稱するならば、諸葛亮—司馬懿の關係は軍師型、諸葛亮—周瑜のそれは參謀型であるといえよう<sup>(21)</sup>。これは三國故事の發展史上、後者の對立構造が、前者に比べてはるかに遅く成立したことに關連すると思われる。諸葛亮と司馬懿の對決は、すでに正史や裴注所引の各傳承に記載があるほか、唐代の三國故事にも登場しているのは先述したとおりだが、赤壁故事における諸葛亮の參與が確認されるのは、早くとも宋代以降であり、諸葛亮と周瑜の對立的構圖の出現は、現時點では元代故事の登場を待たねばならない<sup>(22)</sup>。

したがって、『演義』において司馬懿の異能が具體的に描かれず、諸葛亮との對決も、ほぼリアルなものに終始している事から、三國故事における軍配者は、おおむね諸葛亮—周瑜型の參謀として描かれる方向性を有していたと考えられる。また、この兩者と諸葛亮との關係からは、唐代故事以來の軍師および元代以來の參謀という新舊の性質が、『演義』

の諸葛亮において混在している様相を窺うことができよう。司馬懿が諸葛亮との關係において、本來的には軍事的異能者で、三國故事の發展につれその異能を喪失したとすれば、他の軍配者の中に、類似的の經歷を持つ人物が存在しても不思議ではない。

一例として次項では、三國故事中、劉備集團の軍配者として、諸葛亮に次ぐ地位を占めていた龐統について検討を試みたい。

### 三 もう一人の軍師

#### ——元代三國故事における龐統

龐統は周瑜や司馬懿とは異なり、物語内部においては諸葛亮と同陣營に屬するが、『演義』中の龐統が、諸葛亮に微妙な對抗意識を抱いていることから窺えるように、三國故事の發展史からみると對立的な關係にある。

史上の龐統は、襄陽の名士サロンの中心人物龐德公の甥であつて、諸葛亮と同じく地方豪族階級に屬する。劉備に仕えた後、諸葛亮と並んで軍師中郎將となり、益州進攻に従軍、雒縣を包圍中に戦死した。劉備は彼を甚だ哀惜し、靖侯の諡を贈つたという。<sup>(23)</sup> 龐統の傳は、やはり劉備の入蜀に際して功

績のあつた法正とともに立てられており、この二人は參謀としては、むしろ諸葛亮より活躍していたともいわれる。

『演義』における龐統の事蹟は、仕官をめぐる一連の故事——いわゆる〈鳳雛理事〉<sup>(24)</sup>——を除き、おおむね史書のそれを踏まえているが、元代の三國故事においては、その活躍は『演義』よりはるかに比重が大きい。ことに劉備の荊州南部攻略、いわゆる南征四郡の故事においては、龐統はきわめてユニークかつ重要な位置を占めている。

#### 【『三國志平話』龐統故事概要】

① 龐統は臨終の周瑜を訪ねてその將星を厭し、遺骸を送つて江東に渡る。魯肅は彼を孫權に推薦するが、孫權は聞き入れない。荊州に赴いた龐統は、劉備から歷陽縣令の職を與えられ、鬱々として公務を怠り、糾問にやつて來た張飛に斬られかける。龐統は犬を身代わりにして逃れた後、沿江の四郡を唆して叛亂を起こさせる。諸葛亮は張飛と趙雲を遣わして、長沙・桂陽の二郡を取るが、武陵郡を攻めた劉封は、大將の韓國忠に敗れる。龐統は諸葛亮の説得によつて讎意し、魏延に韓國忠を斬らせて諸葛亮に投じる。さらに金陵郡攻略の際、黃忠を降す策を提案、四郡の平定後、黃・魏二將と共に劉備に見える。(巻下、1b11~3b16)

② 劉備軍は龐統を主帥として西川攻略に乗り出す。諸葛亮は「今年は大歳が西方にあり、大將軍を失うであらう」と豫言す

るが、龐統は一笑に付す。符（浩）江會で劉備と劉璋が會見した際、龐統は黃忠に言い含めて劉璋暗殺を圖るが、劉備に止められて果たせない。まもなく劉備らは西川軍に包圍され、龐統は脱出路を求めて自ら落（雒）城に向かったところ、守將の劉珍に見破られて射殺される。やがて落城を陥した諸葛亮は、劉珍を殺してその靈を祀り、遺體を弔う。その後、成都に迫った劉備軍が、昇仙橋を渡れずいたところ、黃忠のもとに龐統の靈が現れて助力を約し、黃忠はその言に従って敵將張任を斬り、橋を奪う。（巻下、6b-3-9b-2）

このうち、前半、龐統が四郡を焚きつけて叛亂を起こさせる顛末は、雜劇『走鳳雛龐統四郡』にも見られるが、<sup>(26)</sup>雜劇には魏延が登場しないなど、細部に若干の相違がある。

#### 『雜劇『走鳳雛龐統四郡』概要』

瑜統は周瑜の死に際し、將星を壓して天上に留め、その靈柩を送って江東に赴く。途上、諸葛亮に會つて、江東に用いられなければ荊州に来るよう勧められる。はたして江東の魯肅は龐統の人物を見抜けず、失望した龐統は荊州に向かうが、劉備らは不在で、簡雍から未陽縣令の職を與えられる。着任後、龐統が政務を顧みないため、張飛がその首を取りにくるが、龐統は主簿を身代わりにして逃れ、己の力を誇示せんと、江夏四郡の太守とともに反亂を起こす。諸葛亮は關羽・張飛・趙雲らを差し向けて、長沙・桂陽・零陵の三郡を破るが、武陵を攻めた劉

封のみ黃忠に敗れる。張飛・趙雲が加勢に向かったものの、張飛は龐統の布いた陣に翻弄される。孔明は陣頭で龐統を説得、黃忠も關羽に敗れて氣持が動き、ともに太守の金全を捕らえて劉備軍に歸順する。

『平話』では、龐統は南征四郡の際、黃忠・魏延とともに劉備軍に投じたとされるが、史書によれば、南征の際に歸順したのはこの中では黃忠のみである。<sup>(27)</sup>この三人は後に西川攻略軍の主要メンバーとなるため、登場の段階でも一括して扱われているのであろう。『平話』の龐統は四川洛城の人とされるが、これもおそらく西川攻略戦からの連想であらう。なお、これに對して、雜劇の龐統は荊陽の人と稱し、諸葛亮とともに、龐德公・司馬徽・徐庶・孟公威・石廣元・崔州平ら「江夏八俊」の一員とされるなど、やや史書に寄った設定になっている。<sup>(28)</sup>また、諸葛亮が龐統を「哥哥」と稱し、<sup>(30)</sup>「他是箇足智多謀の人、他知過去未來的事」（第三折）と述べるように、雜劇中の龐統は、諸葛亮と同様の異能を有するとされる。また龐統は、自らの能力を「宜四時操琴降崇祭、六丁靖災驅神」と謳い、臥龍岡を訪れて「尋幾塊碎石頭兒、演擺他這長蛇陣」（頭折）したと述べ、實際に黃旗を操って風を起こし、張飛を陣中で迷わせてもいる。なお、『平話』では諸葛亮の赤壁における祭風のほか、やはり「江夏八俊」の一員

である徐庶もまた、劉備軍の軍配者として祭風をおこなっている。<sup>(31)</sup>

このほか『平話』・雜劇ともに、龐統は周瑜の將星を壓しており、自らも祭星能力をもつ諸葛亮は、星が落ちないのを見て彼の存在を察知する。さらに『平話』中の龐統は、死後、昇仙橋奪取に際して黃忠に靈助を與えるが、これは昇仙橋が「非神仙不能言橋」<sup>(33)</sup>とされることから、龐統が死後に昇仙したことを示唆するものと考えられる。

これらの例から見て、元代故事における龐統は、明らかに軍事的異能者であり、徐庶、さらに唐代故事における司馬懿にもその片鱗が見られることと考えあわせれば、『演義』以前の三國故事においては、軍事的異能者は必ずしも諸葛亮一人に限定されていなかったことが窺えよう。

#### 四 龐統と諸葛亮

##### ——〈龐掠四郡〉から〈傍略四郡〉へ

しかし『演義』においては、龐統の異能は司馬懿のそれと同様、全く影をひそめているばかりか、登場する場面そのものが、元代故事の段階に比べて相對的に減少している。ことに元代故事の〈龐掠四郡〉は、『演義』に至って、龐統と全

く無關係な諸葛亮の〈傍略四郡〉<sup>(34)</sup>へと置換されているのである。

先述したように元代故事では、龐統は周瑜の遺骸を送って江東に渡り、その後荊州に赴いて〈龐掠四郡〉の故事を引きする。これに對して『演義』では、龐統の初登場は赤壁の戦いの際、曹操に連環計を授ける場面に溯る。<sup>(35)</sup>一方、周瑜の靈柩を送るのは魯肅の役割であり、龐統は葬儀すなわち諸葛亮の〈柴桑弔孝〉<sup>(36)</sup>の後に出現するのである。

元代故事と『演義』における龐統故事の順序を整理すると、次のようになる。

元代故事：周瑜の死（龐統が厭星）↓鳳雛理事↓龐掠

四郡

『演義』：傍略四郡↓周瑜の死（龐統は登場せず）↓鳳

雛理事

龐統の登場の仕方だけを見ると、周瑜の靈柩を送って呉に赴いたという『平話』および雜劇の方が『演義』より史書に近いが、<sup>(37)</sup>故事全體の年代的順序としては、『演義』の方が史書に忠實である。ただし、劉備の南征四郡についていえば、

龐統はもとより全く關與しないものの、諸葛亮にしても、戦後、零陵・桂陽・長沙の三郡を統治したというのみで、<sup>(38)</sup>攻略戦に直接参加した記録はない。

しかし『演義』においては、諸葛亮は龐統に替わって〈傍略四郡〉を主導するばかりか、龐統故事のいま一つのピークにあたる西川攻略でも、龐統を凌ぐ活躍を見せているのである。〈傍略四郡〉の場合とは異なつて、龐統の死後、諸葛亮が西川攻略に加わったことは「史實」ではあるが、この兩者における『演義』の描寫には、奇妙な符合性が見受けられる。

『平話』の〈龐掠四郡〉において、諸葛亮は金陵郡攻略の際に武侯與黃忠對陣、武侯詐敗、金族趕落陣。行數里，復把金族攔住，武侯四「回？」馬車，車內坐軍師，倒身，弩箭皆出，射殺金族。（卷下，3b—2）

と、詐敗の計略を用いるが、『演義』では〈傍略四郡〉のうち零陵郡攻略の際、

中間一輛四輪車，車中端坐一人：用扇招邪道榮曰，吾乃南陽諸葛孔明也：今來招安汝等，何不早降。道榮大笑：輪大斧徑殺過來。孔明教回車，望陣中走：道榮遙望中央一簇黃旗，料是孔明，只望黃旗而趕。抹過山脚，黃旗扎住，忽地中央分開：一將挺矛躍馬，大喝一聲，直取道

龐統と諸葛亮（土屋）

榮，乃是燕人張益德也。（11—3《諸葛亮傍略四郡》）また、西川攻略における金雁橋奪取の際に

孔明引一隊不整不齊軍，過金雁橋來，與張任對陣。孔明乘四輪車：遙指張任曰，曹操百萬之衆，聞吾之名，望風而走。今至此地，何爲不降。張任看孔明軍伍不齊，馬上冷笑：把鎗一招，大小軍校齊殺過來。孔明棄了四輪車，上馬，退步過橋。張任從背後趕來，過了金雁橋，見玄德軍在左，嚴顏兵在右，來殺張任。（13—7《孔明定計捉張任》）

と、同様のモチーフが繰り返されている。金雁橋は『平話』の昇仙橋、すなわち龐統の亡魂が黃忠に靈助を與えた場所である。

このように『演義』が、元代故事の一要素を、複數の故事中に分散・擴大することは、〈博望燒屯〉<sup>(39)</sup>故事においても見られる。『平話』では、劉備軍の伏兵に遭った夏侯敦（惇）が、山上の劉備に攻めかかるうとして巨石大木を落とされ、さらに檀溪で水攻めに遭う。また雜劇『諸葛亮博望燒屯』は、大筋は基本的に『平話』と共通だが、途中、夏侯敦を博望城に誘い込み、夜陰に乗じて火を放つという一節が加わっている。しかし、これらの細節は、『演義』ではいずれも次



の「火燒新野」<sup>(40)</sup>に持ち越され、結果的に「博望燒屯」「火燒新野」という類似の故事が連續することになっている。<sup>(41)</sup>

要するに、元代故事では顯著であった龐統の異能は、『演義』においては全く消失し、さらに元代における龐統故事「龐統四郡」と昇仙橋奪取は、「傍略四郡」および金雁橋と、いずれも諸葛亮の故事として置換されているのである。

## 五 人物形象の統合

### ——三國故事の轉換點

他人物の故事を諸葛亮のそれに置換し、あるいは元來登場しなかった故事に諸葛亮を介入させる例は、「草船借箭」<sup>(42)</sup>をはじめとする一連の赤壁故事や、周瑜との荊州紛争、あるいは「空城計」<sup>(43)</sup>などの情節においても見られる。『演義』における諸葛亮が、「古今來賢相中第一奇人」と設定されたことより、他の登場人物は、相對的に彼を凌駕し得なくなり、いわば三國故事中の智謀の精髓が、すべて諸葛亮に集中するという現象が起こるのである。同様に、諸葛亮が『演義』における軍事的異能者の代表であるとすれば、彼にのみ異能が残存する理由は、同様の集中作用ゆえと考えることができる。こうして、複数の特性を、限られた人物の上に一本化する

ことにより、人物形象は一定の普遍性を備え、より廣い領域に通用する如く統合されてゆく。

『大明一統志』によれば、四川の龍州ではかつて鄧艾廟を祀っていたのを、宋代、「仇讐に事えて父母を忘れること母れ」と、諸葛亮廟に改祀させたという。<sup>(44)</sup>鄧艾は「艾：沒而有靈、百姓祠以祈福」と、死後の靈驗によって廟祀され、遅くとも六朝宋の頃には、その遺跡とされる鄧艾廟が、京口（現在の鎮江市）に建立されていた。<sup>(45)</sup>唐代に入ると、成都にも鄧艾廟が建立され、宋代には四川だけで三ヶ所の廟があったという。<sup>(47)</sup>しかし、五世紀の成立とされる道教經典『太上洞淵神咒經』には、民間で祀られる死將が「鬼王」となり、遊魂野鬼を統率して疫病などの祟りをなすことが述べられるが、ここで「大鬼主」として名が擧がった者の中には、蔣公琰（蔣琬）、鍾士季（鍾會）らと並んで鄧艾の名が見えるほか、「鄧侯之鬼…亦來殺萬民」「鄧侯之鬼…亦來行病、傷害萬民」「鄧艾鬼王…亦來行十二種下痢病」と、疫災をもたらし萬民を害するとして名指しされている。<sup>(49)</sup>したがって、四川で鄧艾が廟祀されるのは、瘟神としての長い歴史ゆえであり、必ずしもその功績を稱えるためのみではなかったと考えられる。<sup>(50)</sup>

また、夔州の白帝廟は、本來、この地で帝を稱した公孫述

を祀っていたものが、明代に入って劉備君臣に改祀されたが、これは明らかに『演義』の〈白帝託孤〉<sup>(52)</sup>故事が普及した結果であろう。

こうしたエピソードからは、諸葛亮・劉備ら三國故事の中心人物が、周囲の小傳承を合併・淘汰しつつ、元來の地域性を脱却し、いわば全國共通の英雄に造り上げられてゆく過程が伺えるが、その際、『演義』の成立に代表される三國故事の一本化が、少なからぬ役割を果たしたであろうことは想像に難くない。

このように、各主要人物の特性が一本化され、人物形象が一應の安定を迎えたことにより、『演義』においては個々の人物の内面を描寫することが可能となった。換言すれば、三國故事における人物形象は、具體的行動のみが語られる説話型の英雄像から、内面描寫をも加えた総合的な人物表現へと踏み込んでゆく傾向にあり、その一つの指標である『演義』の登場は、いわば故事から文學作品への決定的な轉換點になったといえよう。

以上に述べてきたような、三國故事における軍事的異能者の消長、ならびに『演義』において、この種の異能が諸葛亮

龐統と諸葛亮（土屋）

に偏在する現象は、故事の發展史に關するこのような事情を反映していると考えられる。

しかし、こうした人物形象の統合性が、『演義』に至っても必ずしも定壁なものでないことは、諸葛亮の南征故事におけるプロットの暴走ないし崩壊<sup>(53)</sup>からも看取できる。したがって、この問題に關しては、『演義』諸版本の研究をも含めたより廣範な視野から、なお一層の検討が必要であらう。

#### 注

- (1) 毛宗崗『讀三國志法』。
- (2) 嘉靖本8—5《定三分亮出茅廬》。
- (3) 拙稿「人物故事と傳承の土壌——『三國志演義』の成立をめぐって——」『中國文學研究』第18期、92年12月。
- (4) 嘉靖本1—1・毛本第1回、6—7・第29回、14—6、第68回。
- (5) 13—4・第62回、14—7・第69回、17—2、第81回。
- (6) 7—9・8—3、第35—37回。
- (7) 初出は3—10・第15回、12—7・第59回。
- (8) 張角兄弟については『後漢書』卷七一皇甫嵩傳・『魏書』卷八張魯傳注引『典略』、于吉は『吳書』卷一孫策傳注引『搜神記』（二十卷本卷一）、左慈は『神仙傳』卷五・『後漢書』卷八二方術傳・『搜神記』卷一、華佗および管輅は『魏書』卷

## 中國文學研究 第二十一期

二九方技傳、李意(期・其)は『神仙傳』卷三をそれぞれ参照。なお、五斗米道の開祖張陵は、後世の道教において「張天師」と尊崇されているにも関わらず、『演義』には五斗米道教團の異能に關する記述は登場しない。

- (9) 『蜀書』卷五諸葛亮傳、『世說新語』言語篇注引『司馬徽別傳』など。

- (10) 『魏書』卷一武帝紀注引『曹瞞傳』。

- (11) 『魏書』卷十二崔琰傳注引『魏略』『吳書』。

- (12) 『魏書』卷三明帝紀、『蜀書』卷二後主傳および卷五諸葛亮傳。

- (13) 『史通』卷五內篇・采撰。

- (14) 『大日本續藏經』1—68—5。また陳蓋『新雕胡曾詠史詩』

卷二『五丈原』詩注にも、「仲達占之云未死，有百姓告云武侯病死，仲達又占之云未死，竟不取趁之」(『四部叢刊』三編)と同様の故事が見える。一粟『談唐代的三國故事』(『文學遺產増刊』第10輯、62年)を参照。なお、偽装による占卜の混亂は、これ以外にも多くの説話に見られるモチーフである。

- (15) 『世說新語』文學篇、『伍子胥變文』『前漢劉家太子傳』など。

- (16) 『孤本元明雜劇』第八冊、『元刊古今雜劇三十種』。

毛本では第100回『武侯關陣辱仲達』。なお、『演義』には類似的陣法として、曹仁の「八門金鎖陣」(8—1『徐庶定計取樊城』、第36回『玄德用計襲樊城』)が登場する。

- (17) 『七國春秋平話』における迷魂陣、『楊家府演義』の天門陣、

『封神演義』の十絕陣など。

- (18) ことに諸葛亮の「八陣圖」には、南宋・王象之『輿地紀勝』卷一八三利州路興元府の條に「八陣圖：郡國志云、每陰晴有鼓聲之聲」(江蘇廣陵古籍刻印社、91年11月)とあるように、古くから神秘性が付與され、『平話』『演義』に取り入れられた。『平話』卷下15b—13、『演義』17—8『八陣圖石伏陸遜』、第84回『孔明巧布八陣圖』。

- (19) 湖北省群衆藝術館編『三國外傳』(上海文藝出版社、86年8月)、王一奇・他編『三國人物別傳』(中國戲劇出版社、90年11月)。

- (20) 拙稿「三國故事の變容——劉備過江」故事をめぐって——『學術研究』第42號(早稻田大學教育學部、94年2月)。

- (21) 小和田哲男『軍師・參謀』中央公論社、90年6月。

- (22) 拙稿「羽扇綸巾」と諸葛亮』『文學研究科紀要』別冊18輯(早稻田大學學院、92年2月)。

- (23) 龐統暗自思付、孔明怕我取了西川，故意將此書相阻耳。(13—5『落鳳坡箭射龐統』。毛本では第63回『諸葛亮痛哭力統』)

- (24) 『蜀書』卷七龐統傳。

- (25) 12—4『耒陽張飛薦鳳雛』、第57回『耒陽縣鳳雛理事』。

- (26) 『孤本元明雜劇』第十七冊(台灣商務印書館、87年12月)。

- (27) 『蜀書』卷六黃忠傳、卷十魏延傳。

- (28) 卷下、1b—3。

- (29) 頭折。江夏八俊の名は『平話』にも見える。「孔明」…去

- 江下、有八俊飲會去也」卷中、9b-2。なお、『演義』では、劉表およびその友人の名士たちを「江夏八俊」と稱する(2-2、第6回)が、『後漢書』卷六七黨錮列傳によれば、「八俊」とは本来、李膺・杜密らを指す呼稱であり、劉表はその二ランク下の「八及」に数えられていたという。
- (30) なお、『平話』では周瑜が龐統を「家兄」と稱している。卷下、1b-6。

- (31) 先生披頭跣足、用香羹茶飯一盤、祭起旋風。(卷中、8b-19)。

- (32) 『平話』卷下、15b-13・22a-16。

- (33) 9a-5。

- (34) 嘉靖本11-3。

- (35) 10-4 《龐統進獻連環計》、第47回《龐統巧授連環計》。

- (36) 孔明：却欲下船，一人道袍竹冠，皂縑素履，一手揪住孔明，大笑曰，汝氣死周郎，却來弔孝，此是明欺東吳皆土木偶人耳。掣所佩劍，要殺孔明。：(魯肅曰，孔明以禮至此，不可害之。龐統擲劍而喜笑曰，吾亦戲之耳。遂相歡樂。魯肅自回，統獨送孔明至船中，各訴心事。(12-3-4、第57回)。
- (37) (統) 後郡命爲功曹：吳將周瑜助先主取荊州，因領南郡太守。瑜卒，統送喪至吳：先主領荊州，統以從事守未陽令，在縣不治，免官。(『蜀書』卷七龐統傳)

- (38) 『蜀書』卷五諸葛亮傳。

- (39) 8-8 《諸葛亮博望燒屯》、第39回《博望坡軍師初用兵》。

龐統と諸葛亮(土屋)

- (40) 8-10 《諸葛亮火燒新野》、毛本では第40回。

- (41) 類似的現象は劉備をめぐる周瑜と諸葛亮の智闘においても見られる。注(20)参照。

- (42) 10-1 《諸葛亮計伏周瑜》、第46回《用奇謀孔明借箭》。

- (43) 19-10 《諸葛亮智退司馬懿》、第95回《武侯彈琴退仲達》。

- 『演義』の〈空城計〉は、『魏書』卷十八文聘傳に引く『魏略』の記事を脚色したものと考えられる。丘振聲『三國演義縱橫談』(漓江出版社、83年1月(84年5月2刷) 98頁。

- (44) 卷七三龍州宣撫司の條。(三秦出版社、90年2月)。

- (45) 『太平廣記』卷三二〇引『幽明錄』。

- (46) 劉敬叔『異苑』卷七。

- (47) 『元和郡縣志』卷八・二五および『太平寰宇記』卷十六・八四・八七。

- (48) 『正統道藏』洞玄部本文類・始制字號、卷七7a。

- (49) 同、卷六9a・卷十一8b・卷七12b。

- (50) 吉岡義豊『道教經典史論』(道教刊行會、55年9月)、大淵忍爾「洞淵神呪經小考」(『和田博士古稀記念東洋史論叢』51年2月)、「洞淵神呪經の内容に関する研究」(『道教史の研究』64年3月)。なお、鍾會も同様に瘟神と見なされ、「蜀地八部鬼神」の一人に数えられている。王世貞『列仙全傳』卷三。

- (51) 明正徳七年、巡撫林俊毀公孫述像，祠馬援及川神土神，改曰三功祠。嘉靖十一年，改祠漢昭烈，以孔明配，曰義正祠，

## 中國文學研究 第二十一期

三十六年後以關張配，曰明良殿。（『欽定大清大一統志』卷三〇三、『文淵閣四庫全書』第四八一冊）

都憲林公俊謂，公孫述乃漢賊，義不當祠。（明正德刻本『夔州府志』卷三、上海古籍出版社『天一閣藏明代地方志選刊』六五、82年11月重印）

(52) 1719『白帝城先主託孤』、第85回『劉先主遺詔託孤兒』。

(53) 井波律子『三國志演義』（岩波書店、94年8月）163頁。

※ なお、現代発行の引用書籍は、特にことわりのない限り、すべて初版一刷を使用した。